様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６００

研究課題名（和文）観光学原論と観光教育への哲学・倫理学理論の導入に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on the introduction of philosophy and ethics to tourism studies and tourism education

研究代表者
原　一樹（HARA, KAZUKI）

京都外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：９０４５４７８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：観光学原論への哲学理論の導入に関しては、3つの研究成果を得た。１）アクターネットワーク理論の観光研究への応用に関する現状把握と今後の探究課題の明瞭化、2）松永澄夫の哲学と観光研究の根本諸概念との関係性の明瞭化、3）マキァーネルの観光倫理に関わる言説の特徴の理解と、他の哲学理論との関係性の明瞭化。観光学原論への倫理学理論の導入に関しては、英語圏の先行研究調査より、日本における観光倫理学研究の体系的展開に向けて必要な作業が明瞭化された。観光教育への哲学・倫理学理論の導入に関しては、Tribeの「哲学的実務家」育成プログラムとTEFIの価値教育の提案を踏まえ、日本で必要な作業が明瞭化された。

研究成果の概要（英文）：This research aims to introduce philosophy and ethics to tourism studies and tourism education. First, as for the introduction of philosophy, relationship between philosophy of Sumio Matsunaga and tourism studies, and philosophical characteristics of D. MacCannell's book are clarified. Second, as for the introduction of ethics, we obtained six research questions. These are 1) reflection on the essence of tourism, 2) critical reflection on the ideology and institution which have to do with tourism, 3) critical analysis on the ethical codes of tourism, 4) introduction of ethical decision making theories to tourism studies,5) research on ethical problems in tourism business and various types of tourism, 6)construction of educational system of tourism ethics. Third, as for the introduction of philosophy and ethics to tourism education, the problems of Japanese tourism education are clarified by reviewing Tribe's "philosophical practitioner" and TEFI's educational system.

研究分野：観光学

キーワード：観光哲学　観光倫理　観光と文化　観光とアイデンティティ　アクターネットワーク理論　マキァーネル　ドゥルーズ＝ガタリ哲学　哲学的実務家

１．研究開始当初の背景

（１）研究開始当初、日本における観光学関連の書籍・論文に関しては、地域振興や観光マーケティング等に関する実証研究に比して、観光現象の批判的理解や「観光と倫理」といった主題を扱う研究は未だ少ない状況であった。これは観光学者 J.Tribe が観光教育の一部門として挙げる「自由な反省」の領域が相対的に未開拓であることを意味していたと言える。そこで申請者は、今日の観光社会の理解や批判的評価、観光に付随する倫理的問題の反省への取り組みが、日本において更に活発化される必要があると考えた。

（２）申請者は本研究開始以前、フランス哲学（ドゥルーズ＝ガタリ哲学）研究を出発点としつつ、「観光と哲学」や「観光と倫理学」といった主題に関する検討作業を進めていた。他方、アニメの聖地巡礼に関わる調査や社会的実践等、観光の具体的事象・現場への知見も蓄積しており、高校生による観光プランコンテスト事業等にも携わる中で、観光高等教育の可能性を探究し、更に発展させる必要性を感じていた。以上の、「観光と哲学」や「観光と倫理学」研究、及びそれらの主題の観光教育への応用、という一連の問題意識と研究成果の延長線で、本研究を開始した。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、観光学原論と観光高等教育へと哲学・倫理学理論を導入することであった。

（２）観光学原論への哲学理論の導入については、現代フランス哲学やポスト構造主義などの導入を目的とした。観光学原論への倫理学理論の導入については、まずは英語圏で活発化してきている「観光と倫理」を巡る最先端の議論状況を踏まえ、日本の文脈において「観光倫理学」をいかに構築すべきかの方途を探ることを目指した。観光教育への哲学・倫理学理論の導入については、J.Tribe の「哲学的実務家」育成プログラムの提案や、TEFI(Tourism Education Futures Initiative)の「五つの価値」（倫理、スチュワードシップ、知識、専門家主義、相互性）に基づく観光教育を目指す試みを参照し、日本の観光高等教育の目指すべき姿を探究することを目的とした。

３．研究の方法

（１）本研究の主な方法は、観光学原論への哲学・倫理学理論の導入に向けての基礎文献調査を踏まえた概念的探究であった。

（２）概念的議論と経験的事象を照合し認識を深めるべく、特に観光学原論への哲学理論の導入に関しては、本研究とは別に進めている高野山の訪日外国人観光客の観光経験に関する調査の知見を活用した。

４．研究成果

（１）観光学原論への哲学理論の導入に関する第一の研究成果として、ドゥルーズ＝ガタリ哲学に大きな影響を受けている「アクターネットワーク理論」を観光研究に応用した先行研究に関する文献調査と、別途進めている高野山観光研究の成果とを結び付け、「アクターネットワーク理論」の観光研究への応用に伴う課題を明瞭化した口頭発表が挙げられる（「アクターネットワーク理論の観光研究への応用に関する準備的考察」、観光学術学会、2015 年）。観光研究者 Duim 曰く、ANT に触発された観光研究は「ネットワークを編み上げるアクターや異質な諸契機間の連結の道筋」を追跡し、「いかに意味や仕事が人々や事物に割り当てられるか」を観察することを目指すものである。これらの先行研究は ANT が重視する「ネットワークの異種混交性」や「対称性の原理」を組み込んではいるが、他にも概念的検討や経験的調査への反映が必要な論点が多々、存在する。具体的には以下の三点である。1）理論を洗練させる課題。即ち、ANT における複雑性・カオス理論を取り込む試み（Law&Urry）や「乱雑さ(mess)」を扱う方法論を模索する試み（Law）の分析と、フィールド調査とを往復運動し、相乗効果を目指す必要がある。2）経験的調査における課題。即ち、観光現象に特徴的な「翻訳」の在り方や、Law&Singleton が言う「炎の対象」の理解の精緻化を経験的調査の中で進める必要がある。3）研究実践に付随する課題。即ち、研究という行為を通して実在に介入し、「存在論的政治」に巻き込まれているとされる研究者の倫理的責任の引き受け方についての検討が必要である。

（２）観光学原論への哲学理論の導入に関する第二の研究成果として、日本人哲学者・松永澄夫が構築を進めている哲学と、観光研究との接点を探る論稿を完成させ、共著として出版された点が挙げられる（「松永哲学と観光研究との接点を洗い出す－＜観光の哲学＞に向けた準備的考察－」、『哲学すること－松永澄夫への異議と答弁』所収、中央公論新社、2017 年）。この論考の第一章においては、松永哲学の持つ時代・社会認識（「金の増殖に向かう論理の猛威」の認識、「情報の海・人工環境」への違和感や危機意識、「価値の多様化・複雑化が進み哲学への開口部が開けた時代」という認識、「コスモポリタニズムへの志向性」）を観光との関わりという観点から検討し、観光が現代社会において持つ含意を抽出した。第二章においては松永哲学における「文化」概念を参照し、観光開発の場面と観光経験の場面における文化と観光との関係性を再考した。第三章においては観光の三つの時空間（プレ・ツアー、オン・ツアー、ポスト・ツアー）の時系列に沿って、松永哲学の諸概念や諸洞察と観光との接点を探り、観光研究・観光教育へと活用できるポ

イントを抽出した。第四章においては、松永哲学の学問論のうち「地図」と「私」というキーワードを取り上げて検討し、観光学の構築をいかに進めるかという課題に関する手がかりを得た。

（３）観光学原論への哲学理論の導入に関する第三の研究成果として、著名な観光学者D.MacCannellの「観光倫理」に関する哲学的議論に関し、批判的分析を施し、フランス現代哲学（ドゥルーズ＝ガタリ哲学）との接続を試みた論稿を完成させた点が挙げられる。この成果は、英語圏の哲学的次元における観光倫理研究に関する哲学的検討結果とも言える（「D. マキァーネル著『観光倫理』に関する批判的分析 ―ツーリストサイトと観光者の考察からドゥルーズ＝ガタリ哲学へ―」、京都外国語大学『研究論叢』、2018年）。この論考では論の構成を述べた後、第二節においてアーリの「眼差しの多様化」及び「観光の終焉」と、マキァーネルの「演出された真正性の普遍化」という観光が置かれた状況に関する描写を検討し、前者の持つ説得力に比べ、後者については哲学者ドゥルーズの「コントロール社会」、社会学者バウマンの「スーパーパノプティコン」という時代認識と照合すると、時代を捉える力が弱い点が明らかになった。第三節では「娯楽産業・観光者を歓迎する都市行政部門・都市計画者の協働が生み出す、観光に適した都市内の場所」である「ツーリスト・バブル」に関するマキァーネルの批判を検討した。マキァーネルは「ツーリスト・バブル」を「プチブルの為の監獄」と批判し、「他者や無意識としての都市」を目指す都市計画を評価するが、現代の消費空間を踏まえるとこの批判が現実の可能性を捉え損ないうる点、都市観光開発を巡る根本的批判としては、地理学者ハーヴェイによる資本主義批判等と比べ、射程が短いものである点が明瞭化された。第四節ではマキァーネルにおける「記憶や物語を巡る観光」が現代の観光形態（ダークツーリズム、コンテンツツーリズム等）で活発化しつつある点を確認した後、マキァーネルが風景を見る際の倫理として挙げる「幻想を突き抜けること」が実践としては困難である点、マキァーネルの観光倫理の言説は観光教育の実践へと接続されねばならない点が明瞭化された。第五節では、マキァーネルの言説を普遍性への志向性の強さ、倫理性と創造性の結びつきの強さという観点から、哲学的次元で分析した。第六節では、マキァーネルが議論の俎上に載せたツーリストサイトと観光者という二つの主題に関し、ドゥルーズ＝ガタリ哲学との接続の場面を見出すことを探り、ツーリストサイトの分析に関しては「平滑空間と条里空間」の概念、観光者の分析に関しては「生成変化」の概念の活用が可能である点を明瞭化した。最終第七節では、フーコー、アーリ、ラカン、ドゥルーズ＝ガタリとマキァーネルの言説との関連性を哲学的次元で総括した。結果、マキァーネルの議論はフーコー哲学のみならずドゥルーズ＝ガタリ哲学との接続にも開かれている点、また、マキァーネルの言う倫理性（風景を見る倫理）の議論は教育の文脈に接続し、創造性の議論はドゥルーズ＝ガタリ哲学の存在論や概念装置へと接続する方が、展望が拓けると考えられる点が明瞭化された。

（４）観光学原論への倫理学理論の導入に関する研究成果として、観光倫理学に関する英語圏の先行研究に関する文献調査を実施し、観光倫理学を巡る大よその問題圏を把握した結果を学会発表にまとめた点が挙げられる（「観光倫理学の展開に向けた準備的考察―英語圏先行研究からの課題整理―」、日本観光研究学会、2016 年）。英語圏の先行研究を踏まえ、観光倫理学には大きく二つの役割があることが認識された。一つ目は、観光現象や産業が孕む諸価値や前提を相対化する役割、イデオロギー批判者としての役割である。ここには、Butcher の道徳的観光批判、MacCannell の「観光者の徳倫理」の探究、Singh らの“Critical Debates”の議論などが含まれ、観光に関わる価値や前提を問い直す「反省的」な倫理学の道と言える。これらの反省的議論の存在は、人々の価値意識に影響を及ぼしうるし、教育における批判的思考の訓練や、倫理的（「価値の価値」を議論できる）行為者の養成に有用だと考えられる。二つ目は、個人或いは集団レベルでの倫理的意思決定と倫理的行為の実現に寄与する役割である。「観光者個人の倫理」に関してはMacCannellが先鞭を付けたと言え、集団に関しては、Smith & Duffy が試みたように、倫理学諸理論は価値に関する語彙で状況を描き出すことで、関係者間の「共通言語」の構築に寄与しうる。また、Fennell が試みたように、経済学や心理学の枠組みも援用しつつ、「倫理的意思決定」を下す為の道具として、観光倫理学を更に磨いていく必要もあることが認識された。英語圏の先行研究を踏まえ、今後の観光倫理学の体系的展開を図る為に必要な研究・調査作業として、以下の六点が抽出された。それらは、1)「観光」の本質や在り方に関する継続的反省、2)「観光」を取り巻くイデオロギーや制度批判、3）倫理的コードに関する調査と分析、4)倫理学理論、倫理的意思決定理論の導入、5）各種観光形態や観光産業の倫理的問題の調査、6）観光倫理教育の構築、である。

（５）観光教育への哲学・倫理学理論の導入に関する研究成果として、英語圏での新しい「価値教育」の取り組みと、著名な観光学者J.Tribe の「哲学的実務家」の教育プログラムに関する文献調査を行い、両者を踏まえつつ、概念的・経験的に今後日本の文脈で探究を進めるべき課題を明瞭化した論考を完成

した点が挙げられる（「観光高等教育と＜価値＞の問題に関する考察―英語圏の研究を参照しつつ―」、日本観光ホスピタリティ教育学会全国大会研究発表論文集、2016 年)。Tribe の「哲学的実務家」育成プログラムの観点を日本の状況と照合してみると、特筆すべきは以下の二点であろう。一つは、「思考の創造性」が許され、「可能なアイデアの無限の空間」が描き出される「自由な反省」というカリキュラム領域について、Tribe の挙げるそこでの「三つの哲学的活動」のうち、日本では「真理を明らかにすること」の比重が高く、「事物に関する持続的な懐疑」や「善き生の探究」に関する研究教育が十分に展開されているとは言い難い点である。もう一つは、観光により影響を受ける個人や場所に対する「倫理的で正しい取扱い」を目指し、実際に行動を起こす「自由な行動」というカリキュラム領域について、日本ではまだまだ未開拓と見受けられる点である。TEFI(Tourism Edcation Futures Initiative)の「価値教育」の取組みについて、それが掲げる五つの価値（倫理、スチュワードシップ、知識、専門家主義、相互性）を基盤とする観光教育を日本の文脈と照合した際に特筆すべきは以下の二点である。一つは、「相互性」（相互尊重）という価値について、「教師が自らの価値を認識し、これらの価値に疑問を呈することを厭わないこと」や「様々な文化背景や価値システムへの理解を形成する為にスタッフが継続的なトレーニング機会を持つこと」が要請されている点に鑑み、日本で観光高等教育に携わる者の方もまた、「相互尊重」という価値を目指した努力を続ける必要があるという点である。もう一つは、「スチュワードシップ」という価値について、TEFI が「自然環境の持続可能性」の観点を前景化する形で具体的学修目標を設定する点に鑑み、日本でも「観光と自然環境」に関する諸主題をどれほど観光教育の必須構成要素とすべきかに関する共通理解の形成を検討する必要がある点である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 原一樹、「D．マキァーネル著『観光倫理』に関する批判的分析 ―ツーリストサイトと観光者の考察からドゥルーズ＝ガタリ哲学へ―」、研究論叢、査読有、90 巻、2018 年、1－20、https://kufs.repo.nii.ac.jp/

② 原一樹、「観光高等教育と＜価値＞の問題に関する考察―英語圏の研究を参照しつつ―」、日本観光ホスピタリティ教育学会全国大会研究発表論文集、査読無、2016 年、3－12

〔学会発表〕（計 3 件）

① 原一樹、「観光倫理学の展開に向けた準備的考察―英語圏先行研究からの課題整理―」、日本観光研究学会全国大会、2016 年

② 原一樹、「観光高等教育と＜価値＞の問題に関する考察―英語圏の研究を参照しつつ―」、日本観光ホスピタリティ教育学会、2016 年

③ 原一樹、「アクターネットワーク理論の観光研究への応用に関する準備的考察」、観光学術学会、2015 年

〔図書〕（計 1 件）

① 原一樹　他、中央公論新社、『哲学すること―松永澄夫への異議と答弁』、2017 年、83－109

６．研究組織

(1)研究代表者

原　一樹（HARA, Kazuki）
京都外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：90454785